

東名阪の浸水リスクがある駅

今年も記録的な短時間豪雨に見舞われ、「大雨特別警報」が出る地域が多い。『AERA』9月9日号は、標題のテーマに迫る。写真は名古屋と大阪の浸水エリア、浸水リスクがある駅である。

雨。ありふれた自然現象が、各地に甚大な被害を与え、時に多くの命も奪い去る。気象庁によると、1時間に50ミリ以上の「滝のように降る雨」の発生回数を、統計をとり始めた1976年からの10年間と2009年からの10年間で比べると1.4倍になり、地球温暖化がもたらす水害の危険性が増している。

「秋雨前線に台風の到来が重なる秋こそ注意が必要だ」防災研究の第一人者として知られ、『日本水没』（朝日新書）の著書もある関西大学社会安全研究センター長の河田恵昭さんは警鐘を鳴らす。

日本列島の上に停滞する秋雨前線に台風からの湿った風が大量に流れ込むと、発達した積乱雲が連なる線状降水帯が発生し、大雨を降らせる可能性がある。「とくに注意すべきなのは、高層ビルが連なる大都市」と言う。「山」のように立ちほだかるビル群に風が当たると、強い上昇気流が起きて発達した積乱雲をつくり、大雨が降り続く。しかも現代は、山間部に降った大雨が滝のような勢いで川に流れ込み、広い範囲で氾濫する「連続滝状災害」と呼ぶ広域災害が起きる危険がある。

「そのとき危ないのは、荒川、庄内川、淀川といった大河川の下流域の東京、名古屋、大阪だ」大都市のどこを、どのような水害が襲うのか。大きな被害が想定される東京23区、横浜、名古屋、大阪について調べた。

大阪について言えば、万博やカジノの夢洲に続く鉄道エリアのリスクに注目したい。

(2019年9月8日)

